

P1-139 子宮癌肉腫 16 例の臨床病理学的検討

慈恵医大

矢内原臨, 岡本愛光, 高倉 聡, 山田恭輔, 上田 和, 斉藤美里, 落合和徳, 田中忠夫

【目的】子宮癌肉腫は子宮腫瘍の中でも治療に抵抗性を示し、その予後は極めて不良である。当院での子宮癌肉腫症例の臨床病理学的検討を行った。【方法】2001 年から 2007 年までの期間に当院で加療した 16 例を対象とした。【成績】年齢中央値は 59 歳 (48-76 歳)、臨床進行期は I 期 2 例、II 期 2 例、III 期 8 例、IV 期 4 例 (内 1 例は子宮頸部原発、1 例は再発症例) であった。再発症例を除く 15 例すべてに手術療法が施行され、内 11 例にはリンパ節郭清 (生検) 術も行った。術後補助療法として 11 例に対し化学療法が施行された。組織型は heterologous, homologous 8 例ずつであった。12 症例に再発を認め、7 例には放射線療法を含む集学的治療が施行された。再発症例内 11 例は死亡した。無増悪生存期間 (PFS: 中央値) は 5 ヶ月であり、全生存期間 (OS: 中央値) は 11 ヶ月であった。【結論】長期生存例 2 例は認めるものの、子宮癌肉腫の予後は集学的治療にもかかわらず不良であった。今後、さらに免疫染色を含めた病理学的検討を加える予定である。

P1-140 ヒト子宮肉腫細胞株が誘導する血管新生に対する Epigallocatechin-3-Gallate (EGCG) の作用と他の血管新生阻害剤との併用効果

福岡大

中山直美, 長沼康子, 江本 精, 瓦林達比古

【目的】緑茶の主成分である Epigallocatechin-3-Gallate (EGCG) には抗腫瘍効果や血管新生阻害作用があることが報告されているが、婦人科系腫瘍に対する効果は明らかではない。我々は EGCG の血管新生阻害作用について in vitro で定量的評価を行った上で、ヒト子宮肉腫細胞株が誘導する血管新生に対する EGCG 及び他の血管新生阻害剤との併用効果を検討した。【方法】ヒト臍帯静脈内皮細胞 (HUVEC) とヒト皮膚 fibroblast の Co-culture model を用いて VEGF 誘導下における EGCG の管腔形成阻害作用について調べた。次にその Co-culture model とヒト子宮肉腫株 FU-MMT-3 を非接触共培養し、腫瘍細胞が誘導する管腔形成に対する EGCG の効果を調べた。管腔形成能は CD31 免疫染色像の画像処理を行い、PIXEL 数の定量解析を行った。また培養上清中の VEGF 濃度を ELISA 法で測定した。次に、血管新生阻害作用を増強するために、EGCG と TNP-470 (fumagillin 誘導体) 又は 5'-DFUR (5-FU 誘導体) を併用し同様に検討した。統計処理は Student's t-test を用いた。【成績】1) EGCG は対照群と比較して管腔形成を有意に阻害し、さらに FU-MMT-3 細胞共培養下において促進された血管新生と VEGF 産生を有意に抑制した。2) EGCG の管腔形成に対する阻害作用は TNP-470 又は 5'-DFUR を併用することで有意に増強した。EGCG と 5'-DFUR の併用は FU-MMT-3 細胞共培養下における VEGF 産生を有意に抑制した。【結論】EGCG の血管新生阻害作用が定量的 in vitro 画像評価にて明らかとなり、ヒト子宮肉腫細胞が誘導する管腔形成に対する抑制効果を示した。その作用は、TNP-470 又は 5'-DFUR を併用することにより増強し、現行の化学療法に抵抗性を示す悪性腫瘍に対する有用性が示唆された。

P1-141 当院における過去 17 年間の Sarcoma の臨床的検討

秋田大

佐藤宏和, 佐藤直樹, 佐藤敏治, 熊澤由紀代, 藤本俊郎, 田中俊誠

【目的】婦人科領域における肉腫の発生頻度は高くない。しかし、子宮全摘を含む完全手術例においても肺転移などの再発がしばしば見られ、化学療法にも抵抗性である。当院では子宮平滑筋肉腫に対し Gemcitabine + docetaxel (GD) 療法を 2004 年より段階的に導入してきた。今回、当院における肉腫の発生部位、組織学的特徴、手術・化学療法に関し後方視的に検討した。【方法】1990 年 4 月から 2007 年 9 月までに当院で手術・化学療法を施行された婦人科肉腫症例 24 例を検討した。原発部位は子宮 20 例 (83.3%)、外陰・陰・卵巣・空腸が各 1 例であった。【成績】症例の平均年齢は 54.2 歳、組織学的には平滑筋肉腫が最多で 14 例 (58.3%)、子宮内膜間質肉腫 3 例 (12.5%)、癌肉腫・横紋筋肉腫が各 2 例 (8.3%)、その他 3 例であった。平均再発期間は 37.8 ヶ月 (4-151)、子宮肉腫においては内膜間質肉腫の予後が比較的良好であった。初発症状は性器出血が 5 例、腹部膨満・腫瘤感、過多月経が各 4 例であった。また、術前の正診例は 11 例 (45.8%) にすぎなかった。腫瘍マーカーは CA125 の陽性が 8 例 (33.3%) と高率だが、LDH (4 例)、血沈亢進 (4 例) も参考になると思われた。子宮肉腫の手術可能例では TAH + BSO が標準術式であった。子宮平滑筋肉腫に対する化学療法としては一定したものはないが、2003 年より導入された GD 療法は 4 例中 1 例に PR が認められた。また他の症例においても病変の進行を一定期間コントロールすることが可能であった。【結論】現時点ではいずれの肉腫症例においても有効な化学療法は見出されない。しかしその中において GD 療法により PR を得られた症例があり、今後子宮平滑筋肉腫の補助化学療法として考慮されるべきと思われた。